

編輯だより

…今日は十六日ですよ、早く原稿を廻して下さいと、また遅れますぞ…なるべく機械を空けない様にと配つてゐる印刷工場からの電話である。尤も私はこんなおどかしの電話にはつとめて出ない様にしてるのだが、それでも三度に一度位は返事をしないわけに行かない。

…はいはい、そうですね、明日の三時頃までには全部まとめて届けますよ、ええ間違ありませんとも…がらやんと電話を切つて、さて割付表と睨めつこだ。

×

どうも、毎月発行が遅れるものだから、執筆の諸先生方が中々原稿を下さらない『どうせ発行は来月の五日頃になるんだらう。それならもう三日位待てないわけがないぢやないか』など云はれる。其處で仕方なし印刷屋には嘘を吐いた事になり

…あゝどうも濟みませんでした。實は一寸からだの具合を悪くしてたものですから、え明日こそは本當に届けます、勿論必ず間違ひなし…と、斯うしてあやまつた揚句、びんびんしてゐるのに病氣の振りまでしてはならなくもなるのです。

×

二月は前月に比べると日数が三日足りない。それで随分馬力をかけた筈のところ、又しても遅れてしまった。けれども讀者諸彦よ、悪く思はないで下さい。良心をもつて仕事をしてる私たちは、直劍に好いものを作らうと努めてるがために遅れてしま

のですから。

×

讀者諸彦に相濟まく思ふだけなら我慢も出来るがかくて印刷屋如きにまであやまらねばならない破目となつては、編輯子たるものいさゝか憂うつにならざるを得ない。けれども又、有がたい事には近頃本誌の内容が大變よくなつたと方々から褒めて頂けるそれでうっかり嬉しくなつてしまふ。茲に新らしきエネルギーが湧いて、必然躍進が約束されるのですだからこそ、印刷屋などが如何に騒がしく攻めて来ようと、無責任な原稿を廻して誌面を塞ぐようなことを私はやらない。好い加減に原稿をかき集めて手早く雑誌を作りあげて、印刷屋などに喜んでもらつたとて、仕方がなからうではありませんか。

×

さて印刷屋よ、にくまれ口をたゞいた形になつたが私には讀者と云ふ味方があるのだから、所詮喧嘩にはならぬと諦めて、寫眞は努めてきれいに刷り、赤字は嚴重に差替えて、誤植のない様にせよ。

(2-24. R. K. R.)

×

齋藤君治君からの來信の一節：新年號以來著名工事視察の手引欄が復活せしを此上なく喜び居候、又小生の如く毎卷合本として机上に飾り置くに於て頁数が累加數と相成候も如何ばかりの便利か計り難く候。尙貴社長の佐久發電所工事記録なる一文期待致し居候處期待に反せざる好記事にて心より味讀致し居り次號の發行が待たれ申候、小生の如く發電工事(日月潭發電工事)に關係ある讀者としては此上なき好資料と存居候。

土 木 工 事 畫 報 第十卷 第三號		定價七十錢 (稅二錢)	每月一回一日發行 一ケ年十二册發行
購 讀 料	昭和九年 二月廿六日印刷納本 昭和九年 三月 一日發行	廣 告 料	
壹部七十錢 稅二錢 參ヶ月 貳圓 稅共 六ヶ月 四圓 同 一ケ年 八圓 同 外國一部 七十八錢 稅 共	編輯兼印刷發行人 岡崎保吉 東京市豐島區長崎仲町二丁目三六二九 印刷所 共同印刷株式會社 東京市小石川區久堅町百八番地	本誌に廣告掲載御希望の向は御報次第社員參上御相談に應ず。	
注文は總て前金、送金には必ず振替貯金にて、東京七〇貳六五番宛拂込の事、但し六ヶ月以上の申込は御希望により集金郵便を差出します。	發行所 工事畫報社 東京市麴町區丸ノ内三丁目六 電話 丸ノ内二六三三番 振替 東京七〇貳六五番	大 賣 捌 所 東京堂・東海道 大東館・北隆館	

營業科目
 銑 鉸 及 電 弧 溶 接
 鋼 橋 桁 鐵 塔
 鐵 骨 家 屋 鐵 管
 ポ イ ン ト ク ロ ッ シ ン グ
 軌 條 用 タ イ プ レ ー ト
 其 他 附 帶 業 務

株式會社

橫河橋梁製作所

本社 東京市芝區月見町一丁目七番地 電話 三田 一七一

東京工場 東京市芝區月見町一丁目七番地 電話 三田 〇七七

大阪工場 大阪市港區南境川町三丁目三〇番地 電話 西 二二五

電話 西 二二五 八八八 四三二 番番番

電話 三田 四一一 〇七七 三三二 番番番

近

刊

三月中旬發賣

工學博士 宮本武之輔氏著

技術・社會・人生

菊判美裝 總紙數約 400 頁—定價金 1.50 圓送料 0.14

本書は宮本博士が大正五年から昭和七年頃までに發表せられた評論・紀行・隨筆の類を蒐録した文集である。筆不性の定評ある我が技術界に於て奔放自在、且つ多種多方面にその才筆を揮ふ博士の如きは—異彩と稱するを憚らず。博士の自序を借りて言へば「私と言ふ—技術家の社會觀・人生觀」と銘打つて新裝を凝らし讀書界にデヅキユせんとする本書は、技術家でありながら技術の枝葉末節に拘泥する事なく、而も技術及び技術家の本領をしつかり把握して歩武堂々、天下を濶歩するの概ある博士の面目を躍如たらしめるものがある。

博士が常に中正穩健な態度を以て社會の公論を指導し、或は燃える様な熱情を以て青年を誘掖せられつゝあるのは「**土木工學**」時評欄に讀まれる讀者の悉く首肯せられる所であるが、本書には青年時代の博士の犀利な觀察と批判、純眞な熱意と情操とが横溢してゐる。

わが技術界の覺醒を促がすための縱談横議、吉野作造博士の無政府主義に對する反駁、武藤山治氏の實業同志會に對する批判、その他の堂々たる論說から越路雁信、銅像物語の様な小品に至るまで、その間を貫いて血の滲む様な博士の純情が織り込まれた本書は博士の言はれる如く單に「—技術家の人生の記録」たるに止まらずして實にわが技術界の貴重なる記録である。切に愛讀を奨める。

内 容 一 般

論 說

直木博士に答へ併せて先輩諸氏に質す—再び技術家を論ず—技術政策の眞諦を思ふ—溪谷の黎明—技術家結末の機運—人類生活の基調—唯物史觀の檢討と人道主義—商工黨組織に對する私見—労働全收權の道義性—歐米に於ける技術者組合運動—直轄工事と請負工事の得失を論ず—土木行政統一論

時 評

技術と労働—巷に立ちて—大正十四年を顧みて—ジョン・ターナー君を迎ふ—労働の權利と義務—政治行動の基調—越路雁信—産業合理化問題私見—共

業救済と土木事業—滿蒙問題と技術家—一時局匡救土木事業に就て

巴 里 通 信

佛蘭西へ—巴里通信—巴里夜話—佛國の死活—北佛荒廢地方—佛國及佛國人

伯 林 通 信

伯林春秋—ドクター・コンラデー—獨逸の子供ら—南獨紀行—ラインの守り—獨逸及び獨逸人

隨 想

日本工人俱樂部—狂婦人—五月雨の頃—夏飛脚滿洲往來—錦絲町物語—補修工事の竣功に際して—銅像物語— $X+Y=A$ の解法

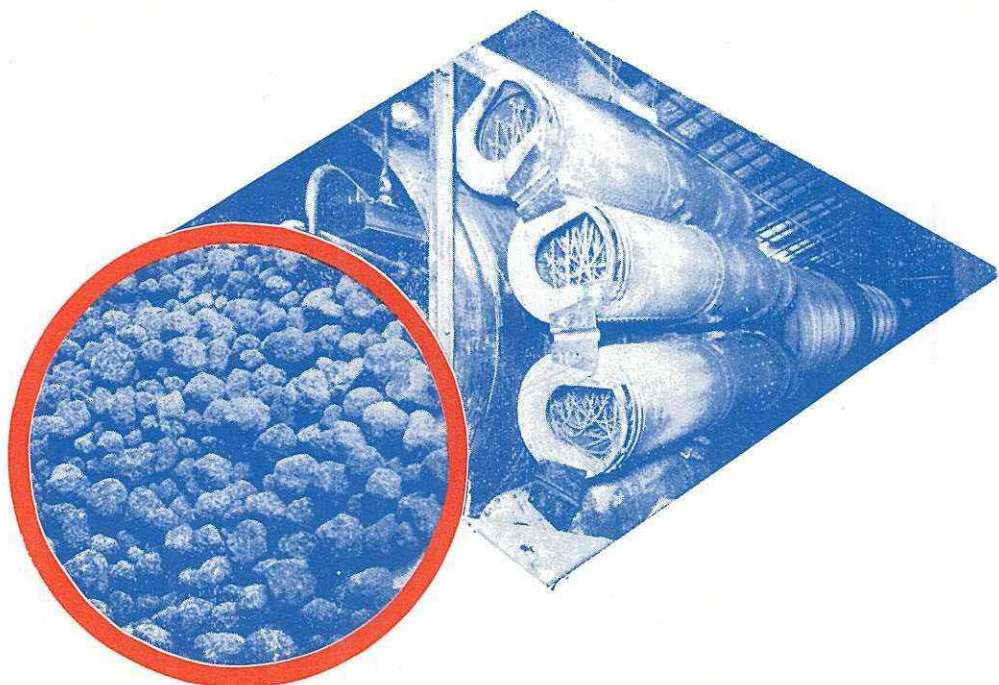
東京市京橋區銀座七ノ三
合資 社會 工業雜誌社發行

振替東京一四六五〇番
電話銀座(57)二〇二三番

超 高 級

浅野ペロセメント

コノ 窯ト コノ クリンカー ハ
我國セメント界ノ王位ヲ占ム



浅野ペロセメントクリンカー

浅野ペロセメントコンクリート標準強度

	水比	調合比	スラング em	フロー %	應 壓 強 度 kg/cm ²				
					1 日	2 日	3 日	7 日	28 日
昭和 7年度	0.65	1:2;4	13.2	210	33.7	89.8	143.5	254.0	391.7

説明書御申越次第送呈

浅野セメント株式會社

東京・丸ノ内・海上ビル新館

THE "KOJI GAHO"

AN ILLUSTRATED CONSTRUCTION REVIEW

VOL. 10, NO. 3

Published Monthly by the Koji-Gaho-sha
Tokyo Japan

日立工事用諸機械

ボ
送
壓
起
ホ
捲

ン
風
縮
重
イ
揚

ブ
機
機
機
ト
機



日立製作所

東京・丸の内

日立製造

大正十四年七月二十八日
昭和九年三月一日發行
第三種郵便物認可
印刷部 納本
(毎月一回發行)

土木
建築
工事
畫報
第十卷
第三號

定價 金七拾錢 送料二錢